

大阪府からのお知らせ

夏の暑さにご注意を

近年、大阪では猛暑日の日数が増加し、熱中症による搬送者数も高い水準で推移しています。毎年約30人の方が農作業中の

熱中症により死亡しており、7月8月は特に注意が必要です。●夏の作業で心がけること

- ・帯の作業は避ける
・便利な熱中症対策グッズ(空調服、冷却グッズ等)の活用
●「熱中症警戒アラート」を活用しましょう!

- ・熱中症の危険性が極めて高くなる予想された場合に注意を呼び掛ける「熱中症警戒アラート」が気象庁や環境省から発表されます。
●暑さ指数に応じた農作業を行います!
・暑さ指数に対して当日に予定している作業の強度が高い場合は、より軽い作業への変更を検討しましょう
・変更が難しい場合は作業の時間を朝夕の時間帯にずらす、



休憩や給水の回数を増やすなどの対策をしましょう
(提供:大阪府環境農林水産部 脱炭素・エネルギー政策課)

東京は武蔵野の住宅地に生まれ育ちました。昭和の終わり頃、多摩川に近づくとも畑や無人販売所がありました。当時は住宅地にも用水路が通っていて、生き物を探るのが好きでした。魚は難しく、手でとれるのはザリガニやタニシでした。

しました。山あいの過疎村へ聞き取り調査に行ったとき、高齢の農家の方は、年金生活をしておられましたが、農家の広い家屋の軒先には色とりどりの花が植えられ、また秋には黄金色に輝く田に、はさ掛けの風景。こんな

性別関係なく続けられそうな、自分の関心の向く先といえば、本を作りたい、書く仕事がない、というものでした。転々としながらも出版や書く仕事に関わり続けて、2021年に独立しました。農業をテーマとした本をつ

い経験になりました。大手出版社は分業して有名作家等によるベストセラーづくりに躍起ですが、小さい会社には小さい会社のやり方があります。一般の書店さんには並びにくい専門的、ニッチな分野でも、類書がないという優位性から読者の手にとってもらえるのです。農林業、SDGsなどのほか、幅広いテーマの本づくりをしています。

れません。全国に出版社は3000くらいあります。会社としての形はとらずに本作りをする人も多いです。「文学フリマ」という本の展示即売会が東京流通センターで5月に開かれたのですが、1600もの出店者が集まり、1万人以上もお客さんを動員したことが話題になりました。本は農作物のように食べることはできませんが、人が生きるうえでよりどころになるものです。斜陽産業と言われ続けて30年くらいが過ぎますが、この黄昏の時間がいつまでも続くことを祈り、私は日々仕事に励んでいます。

随想

自宅の小さな庭には関西にはないホクホクとした黒土が剥き出しになっていて、土いじりすると手が真っ黒になりました。関西に来るとまったく様相が異なり、土が砂っぽく茶色だったり灰色だったりするので驚きました。今では用水路も土の庭のある家も、空き地も姿を消しました。

大学卒業後、農山村に暮らしてみたいという思いはありますが結局、仕事が多く女性が一人で過ごしやすい都会で働くことしか考えられませんでした。



小さな出版の種をまく

図書出版 実生社

代表 越道 京子

に美しい里山の風景の村にも若者はおらず、将来どうなってしまうのだろうかという思いが、以前に職場で『農業と経済』という老舗誌を担当してからです。研究者が中心となり発信する雑誌でしたが、農政や学術の最先端のテーマに触れることができ、また日本中の農業経済学の先生方とご縁をいただきかけがえのな

農業では作物の種をまきますが、出版の仕事では企画の種をまくのです。アイデアに水や肥料を施しながら育てて、著者に原稿完成をめぐらしていただき、そこから概ね数か月で本という最終ゴールにたどりつくことができます。人間の精神や思考という物質化できないものをいわば「原材料」とすることが、ほかの仕事との違いかもしれません。

◇筆者の紹介(こしみちきょうこ)
1978年東京生まれ。2021年に京都で一人会社を設立し、出版事業を開始。都市農業の現在・過去・未来を考える『都市農業新時代』(中塚華奈・榎田みどり・橋本卓爾 編著)を2023年秋に刊行予定。